

## 日本エンドオブライフケア学会（Japan Society for End-of-Life Care）設立趣旨

わが国においてエンドオブライフケアという用語は、まだ新しい用語である。北米では1990年代から高齢者医療と緩和ケアを統合する考え方として提唱され、がんのみならず、非がんを含めたあらゆる疾患や症状、苦痛等をもつ人たちを対象としたケアを指している。エンドオブライフケアを成すためには、国際的な人口動態の変化、地域の文化や特性を踏まえ、生活ニーズを含み生命を脅かす健康問題として人々が認識し、新しい概念で医療制度や地域ケアシステムの変革を推進する必要がある。

人生を80年・90年と生きることができるといえる現代では、年齢に関係なく終末期に向けた生き方を考えることが求められる。終末期の生と死の問題を医療中心の医療モデルから、その人の住まう地域（コミュニティ）でどう生活するかを中心に据えた生活支援・家族支援を含む生活モデル（Care & Comfort）を重視し医療と生活を統合するケア（Integrated Care）をとらえることが必要である。それは、人生の主人公である個人が主体的に生きるための力を引き出し、支えるための新しい包括的ケアのあり方が求められているともいえる。先行するターミナルケアや緩和ケアといった終末期ケアの概念は、このような包括的ケアを提唱するには限界があり、新しいパラダイムへの転換が求められている。従って個々人のQOLすなわち生命・生活・人生の質と価値を高めるために最期までその人の生き方を支えるエンドオブライフケアを基盤にした医療制度や地域ケアシステムの変革を推進する必要性が高まっているといえる。こうした社会の実現には医学、看護学、哲学、倫理学など「人間」を対象とする諸学問分野の知から学際的かつ総合的に学び、国内外の学識経験者、教育者、ケア現場の人々、一般の人々が、多様な立場を横断しすべての人が支え、支えられ生きていることの価値を見出せるようなケアのあり方を議論する場が必要である。さらにその人自身が「主体的な生き方、その有り様の模索」を可能とするような新しい支えあいを創り出すためには、健康な時から「死を考え、話し合う」新しい文化の醸成が重要である。

本学会では、エンドオブライフケアとは、すべての人に死は訪れるものであり、年齢や病気であるか否かに関わらず、人々が差し迫った死、あるいはいつかは来る死について考え、最期までその人らしい生と死を支えること、ならびに生と死を見送った家族が生きることを支えるケアであると考えている。わが国独自の生活文化や価値観に根差したエンドオブライフケアを発展させるために学際的かつ学際的研究を蓄積し、その成果を実践や教育に活用し、世代間交流や国際交流などを通して健康と福祉および文化の発展に貢献することを目的として、一般社団法人日本エンドオブライフケア学会を設立する。